

学生担当者報 1

発行 / 天理教学生担当委員会 発行責任者 / 清水慶政 編集責任者 / 中山祥吉
Vol. 431 立教 185 年 2022 年 12 月 25 日発行
TEL 直通: 0743-63-2489 FAX 0743-62-5780 E-mail tsa@tenrikyo.or.jp
TSA Website https://tsa.tenrikyo.or.jp Happist https://happist.net



立教百八十五年 学生担当者大会における表統領中田善亮先生ご挨拶 十一月二十五日・第二食堂

皆さま方には、日頃から学生たちの育成のうえにご尽力いただきまして、誠にご苦勞様でございます。また、ありがとうございます。

9月に本部学生担当委員会が任期満了によって改選されました。後ほど方針の披歴とともに挨拶もあると思います。

振り返ると前期3年は丸々コロナに翻弄された3年でした。活動や行事など中々具体的なことは推し進めることも難しく、その分さまざまに苦勞してくださったと思います。今期はそこからの再出発、スタートでありまして、今度は丸々百四十年祭の活動に当てはまる3年任期になります。

できるだけ積極的に活動を推し進めていけるように考えさせていただきます。いづれにしても本部の委員会だけでなせることではなく、ここにおられます皆さまのご協力なしには成り立つものでもございません。まずはどうか新しい委員会にもお心寄せをいただけますように、私の方からもお願いをさせていただきます。

さて、新型コロナウイルスが流行しはじめてほぼ3年になります。学生たちにとっては本当に残念な3年だったと思います。いろいろなことができませんでした。我々大人に比

学生担当者報

報告

十一月例会

去る11月25日、第二食堂において「11月例会」を開催。出席は40教区、126直属。

・東愛 1月22日10時〜 大教会
・此花 1月24日14時30分〜 大教会
・岐阜 1月30日9時30分〜 教務支庁
・直属 12月22日10時〜 大教会

学生層育成者講習会

日程・会場案内

期日…立教186年1月25日
時間…15時30分受付 16時開始
会場…教庁4階講堂

お知らせ

一月例会

各地の動き

【教区学生層育成者講習会】

・福岡 11月4日 教務支庁

清水慶政委員長出向 89名

【直属学生層育成者講習会】

・錦江 11月6日 大教会

葛西直巳前副委員長出向 100名

・城山 11月22日 大教会

中山祥吉副委員長出向 35名

人事

《立教185年11月25日付》

【直属学生担当委員長辞令交付】

・雲庵春彦（本島・本九）

・齋藤元晴（明和・道法）

・太田秀範（中紀・鮎川）

・酒井陽一（西成・國典）

・西村康世（一筋）

業務記録

《立教185年11月16日〜12月15日》

11月20日 まなびばチーム会議

24日 担当者活動部部会

25日 委員会

担当者大会 例会

27日 育成に役立つ研修会直前研修会

28日 育成に役立つ研修会（29日）

12月6日 学修部部会

8日 担当者活動部部会

人材育成部部会

学修大学の部研究室

学修高校卒業生コース研究室

9日 委員会

学修高校の部研究室

春の学生おちばがえり
プロジェクトチーム会議

12日 学修連絡会

学生部部会

まなびばチーム会議

14日 勉強会チーム会議

べたら1年々々が非常に貴重な年代だと思えますので、その1年々々を奪われてしまったというか、十分にいろいろなことが経験できなかったということは、本当にかわいそうであり残念だったと思います。また学生会活動につきましても、担当者の皆さんにとっても難しい3年間だったと思います。これからコロナも段々と制限が緩んでいくと思いますし、そう期待したいところではあります。それに応じてしっかりと学生たちとお付き合いができるように、またしっかりと育成活動ができるようにお骨折りをお願いしたいと思います。

10月に『諭達第四号』をご発布いただきまして年祭活動に入るわけでありまして。それに向かって準備や心構えをつくるということをお願いしてまいりまして、準備を心掛けておられた方々は『諭達』が出ると同時にスタートしておられます。年が明けてからスタートされるというのも結構でございます。しかしそれより先のスタートはありません。遅れないようにしっかりとスタートしていただきたいことは、この学生担当委員会の活動としても同じことが申せますので、それぞれの分野において速やかに年祭活動として学生担当委員会活動、また学生会活動がスタートできるように工夫と打ち出し等をお考えいただき、進めていただきたいと思います。

その『諭達』であります。今回は『諭達第四号』。前回の『諭達第三号』は教祖百三十年祭活動にあたっての『諭達』でありました。今回は百四十年祭、同じ教祖の年祭を主題と

してお出しいただいた『諭達』であります。

教祖年祭活動、教祖年祭の意義、これは何年祭であろうと本来の意義は毎回々々変わるといふものではなく、基本は同じものだと思います。しかし、大事なことは百四十年祭の活動は、例えば今ここにいらっしゃる皆さんは、学生担当という立場を持って迎えられると思います。10年前は違ったと思います。10年前は学生だったという方もおられるかもしれませんが、10年後はまた違うかもしれない。つまりこれは学生担当に限らず、いろんな意味で今回の自分の立ち位置ということにしっかりと焦点をあて、その『諭達』を受けさせていただくということが大事だと思います。

前回と同じ年祭だから内容もだいたい同じだと言ってしまうのではなく、内容は仮に大筋同じであっても、我々が変わっているということを肝に銘じて、今回の三年千日を迎えさせていただかなくてはならないと思っております。

そのためにも『諭達』をしっかりと読み込んでいただきたいと思えます。読み込むと申しますのは、何度も読むということではありません。自分のことだけではなく、隣の人の『諭達』の読み方、言葉一つひとつの受け止め方ということも聞いてみるということです。同じ文章でも読む人によって心に掛かるところ、元気をもらえるフレーズは違うと思うのです。年齢であったり、男女の別であったり、いろいろと立場持ち場によっても違うかもしれません。そのようなこともしなが

た。

・もつとこの研修会を宣伝してほしい。

■育成者支援コース内容

育成者支援コースでは、「現代の若者の特徴について」などの講義から育成者としての心得に気づき、また組織的なものに限らず、いち育成者として自分にどんなことができるかを受講者同士で考え、共有しました。

【育成者支援コースの感想】

・学生という立場でひとくくりにするのではなく、一人の人間としてよく知る必要があると感じた。
・身の周りの方をおたすけするヒントや、自分に何ができるのかが見えてきた。

・育成はいろんな人の協力によって成し得ていくものだと思います。

青空

「今夜はモモーロにしよっか？」

大学時代、学生層育成要員としてつくし会で育てていただき、当時の委員長さんの「卒業後寮幹事になるためではなく、将来布教師になるために学びなさい」の言葉は今でも胸に残っています。

話は変わりますが、先日夕飯時のスーパーで、若い男女から聞こえてきたのが冒頭の会話です。「モモーロ」という単語に全く聞き覚えが無く、料理名なのか食材の名前なのかさっぱり分かりません。「モモーロ」の正体が気になり、スマホで検索してみても何の手がかりも無く、だんだん自分の買い物にも集中できなくなっていました。

「モモーロ」発言があつたのは精肉コーナーあたりだったので商品を一つずつ確認し、牛、豚、鶏と見てようやく謎が解けました。「モモーロ」(×ももーろ ○ももひとくち)

思い込みに気をつけ、心新たに年祭活動に取り組んでいきたいと思えます。

第15期人材育成部本部スタッフ 福田立教

明日につながる 学生WEBSITE Happist

<https://happist.net>



QRコード読み取り

- お道の教えや心にグッとくるお話をご紹介
- おちばの行事情報や各地の学生会情報も充実
- 「Happistスマイル」では学生の笑顔をお届け

学生に手渡しできるリーフレット
HAPPIST [NOT] NET
ハッピー ネット

毎月25日発行。例会資料としてお配りしています。
部数のご変更は学生担当委員会事務局まで。

立教百八十五年

育成に役立つ研修会 開催報告

十一月二十八日、二十九日の二日間、本部第七・八・九母屋、東左三棟を会場に「育成に役立つ研修会」を開催し、教区・直属・海外から五十七名の方に受講いただきました。

今年は、プログラム体験コース、トレーナーコース、プログラミングコース、育成者支援コースの四つのコースを設けました。

【コース説明&コース受講者感想】

■プログラム体験コース内容

プログラム体験コースでは、学生層育成行事で使用しているプログラムを実際に体験することでその有効性を感じ、「グループワークについて」の講義からその心得を学びました。

【プログラム体験コース受講者感想】

・グループワークなどを通して、人の意見を聴くことや自分の意見を言うこととで心的交流ができ、かつ普段ではなかなかできない経験ができてありがたかった。

・常に信仰と結び付けていることに感銘を受けました。

・同じ言葉からでも抱くイメージは異なるので、自身の意見に固執せず、柔軟に意見を受け入れられる自分でありたいと思った。

■トレーナーコース内容

トレーナーコースでは、トレーナーの実体験から各種育成行事で使用しているグループワークへの理解を深め、その進め方の習得と「トレーナーの心得」の講義を聞きトレーナーを務める上で必要な心構えを学びました。

【トレーナーコース受講者感想】

・頭で理解していても行動に移すのは

難しく、何度も何度も経験をするこの大切さを学んだ。

・行事中やトレーナーをしているときに限らず、日常生活から人と接する姿勢を見直す機会となった。

・トレーナーとしての心得は、信仰者としての心得でもあると感じた。

■プログラミングコース内容

プログラミングコースでは、各種育成行事の企画、立案、プログラム作成についてを解説を交えた実習形式で学び、「プログラミングについて」などの講義を聞き、行事の企画・開催に対する意識を高めました。

【プログラミングコースの感想】

・育成に携わる方たちが、皆この研修会を受講してくれたら、もっと一つ一つの行事が良いものになると思った。

・今回学んだことを学生会、教会行事に限らず、委員の丹精に役立てたいと思っ

ら、しっかり『諭達』の行間を読ませていただく。そして真柱様、さらには教祖が自分に何をお求めくださっているのかということをお案する。つまり、しっかり自分に向けて思案し、受け止めさせていただく、という意味で読み込んでいただきたい。更に『諭達』を幅広く、また深く読ませていただきたい。ご発布いただいた始めに、まずそれをさせていただくことが大事だと思います。

そして全教一手一つということを抑えたいという通り、教祖年祭活動は全教の共通の旬であります。つまり一手一つというところ、どうしても例えば教会であるとか、系統とか地域とか、そういった自分の立ち位置から、横に考える一手一つということをイメージされる方が少なくないと思います。まさに皆さんは年代を超えて、学生たちに縦の一手一つということを少し意識して、担当者活動を進めていくてくださるばと思います。

つまり学生たちにも役割があるということです。一手一つですから、それぞれの役割があるということです。そのことを学生たちに理解していただくために何が必要かということをご相談いただきたいと思います。当然、まだ『諭達』を読んだとしても言葉の一つをとつてもなかなか難しく理解できない。お道の言葉もたくさん出てきますので、そういうことから始めなければならぬと思います。いろんな意味で一手一つをお考えいただきたいと思います。

『諭達』の中にも縦の伝道ということを記していただいています。「教祖お一人から始まったこの道を、先人はひながたを心の頼りとして懸命に通り、私たちへとつないで下さった。その信仰を受け継ぎ、親から子、子から孫へと引き継いでいく一歩一歩の積み重ねが、末代へと続く道となるのである。」こういう一節がございます。

縦の伝道というものは、一般的に申せば親がその責任の主体であると思います。学生担当の皆さんであったり、少年会の担当であったり、あるいは教会長。そういう者たちはその後押しというか、お手伝いという主体ではないということになってしましますが、その場面々々では皆さん方も主体ですけれども、全体としてはやっぱり親が責任という意味では主体でなければならぬと思います。そういう意味でしっかりと後押しをしていただきたいと思ひますし、いくら主体となる親が、自分が責任を持つという思いがありましても、いろんなところから助け舟を出してもらうというのはありがたいことでもあります。そういう位置づけでぜひ縦の伝道を成し遂げていただきたいと思ひます。

そのためにもいつも申すことですが、縦の伝道というのは親から子へのにをいがけだと思ひます。にをいがけというとなかなか難しいことだと思ひます。一人の人にお道のにをいを掛けて、何らかをきつかけににをいを掛けて、そしてこの道の信仰を知っていただき、また信仰の喜びというも



のを得ていただいて、そしてつながっていただく。なかなか簡単なことではないということは皆さんもよくお分かりだと思います。でも親から子へもやっぱりにいがけだと思いません。けれど一般的に教外の人になにをいを掛けるというよりは、それに比べればよっぽど近くにいてくれる人ですし、また魂のいんねんということを思案しましても、神様の近くに生まれた子だと思えます。そういう意味では、一般的な外部へのいをいがけに比べれば、幾分可能性は高く、やりがいもある。そういうことだと思います。

しかし難しい。簡単ではないと思っておかなければならない、ということは昨今特に思います。ひと昔前までは親の信仰を子供が継ぐことは当たり前だと済まされていたことが、今ではそれでは済まされないということは皆さんも常識だと思います。それほど難しくなってきたことは明らかです。で、代を重ねた信仰の人の子供であっても、一人の人格にお道のいをいを掛けるということで対応していかなければならないと思います。

しかし、それは伝える側の問題です。伝わる側の学生たち、子供たち、これは何かという親の信仰にぶら下がって、親の信仰をまねしながら、聞きながら育っているものです。いつの間にかお道のことを一生懸命にやるようにはなっても、本当に自分自身の信仰になっているのだろうか。親の信仰のまま気付かずにいると、何かあった時に責任がないものです。

から、ふと疑問や不足が出てくるとそのままそちらに引っ張られてしまうということが少なくないと思います。その理由はさまざまだと思いますが、そのひとつに、自分で自分の信仰、つまり身上・事情になった時、自分で自分のことを考える、自分を振り返って思案する、そういったことが責任を持つて自分でできるということが信仰だと思います。

つまり、親の信仰から自分の信仰に切り替えるという作業が必要だと思います。これをいい加減にしているとあまりよくない。それはその次を考えてみた時に、親から子、子から孫へと仰つしやるように、親から子、今度はその子が孫へと伝えるべき責任、重みを持っているのだろうかということになってくるわけです。だからこそ、どこかで切り替えていく、それは学生の年代、高校生・大学生という年代では必ずしもないかもしれませんが、非常に大きなチャンスのある年頃ではないかと思います。

これは行事で何とかするということではありません。それぞれで働きかけていかななくてはならないし、先ほど申しましたように、親がその責任者です。しっかりと親にも意識を持つてもらえるように働きかけていくことも必要だと思います。そういう意味で申ししましても、成人の旬であるこの度の年祭活動の三年千日は、まさにうつつつけの旬なんだと考えられると思います。ぜひそういったところも皆さんで話し合っていただければと思います。

第60期 天理教学生会委員長選挙

11月19日、教庁4階講堂を会場に第60期天理教学生会委員長選挙が行われ、運営委員18名が出席し、傍聴者24名が訪れました。

はじめに、立候補者である天理大学2年生の中臺理生之助さん（日本橋大教会・埼玉教区）は所信表明において「お道に繋がる学生みんなが、いつでもどこでも楽しいと思えて笑顔の途切れない学生会にしたい。そしてそのために、かしの・かりものについて学ぶことと仲間を大切にすることを推進したい」と、第60期天理教学生会にかける思いを述べました。

その後、運営委員による活発な質疑応答が行われ、学生たちは立候補者の答弁に真剣に耳を傾けました。投票の結果、中臺さんが次期委員長として信任され、出席者一同は次期委員長を芯とし、来春から始まる第60期天理教学生会の一層の充実を誓いました。

令和 5 年 天理教学生担当委員会 活動方針

基本方針

「教祖を慕い、ひながたを辿る喜びを共に味わおう」

このお道は、教祖お一人から始まった道であり、教祖の子供可愛い親心とご苦心によっておつけいただいた道である。そして、諭達第四号で「教祖はひながたの道を、まず貧に落ちきるところから始められ、どのような困難な道中も、親神様のお心のままに、心明るくお通り下された」とお示しいただくように、教祖はどんな中も常に明るく喜んで、たすけ一条の心でお通りになられた。

学生や私たちは、日々の暮らしの中で悩んだり、迷ったりする日もあるが、この教祖の陽気ぐらしのひながたがあるからこそ、未来に希望を抱き、明るく前を向いて、ふしを乗り越えていけるのである。

教祖 140 年祭に向かうこの旬に、まずは先に道を歩む私たちが、教祖を慕い、教えをしっかりと心に治めて、この信仰の有難さとひながたを辿る喜びを学生たちに伝えていきたい。

そして、教祖の年祭を成人の節目として、教祖のひながたを道しるべに、陽気ぐらしへ向かうこの道を学生と共に歩んでいきたい。

＜実践項目＞

一、教祖のひながたを学び深め、学生に伝えよう

まずは育成に携わる私たちが教祖のひながたを学び、自ら実践する中に理解を深めていく。そして、自らが学び得た実感とともに、ご存命の教祖のご存在とお働き、そして、陽気ぐらしのひながたについて学生に伝える。

一、学生のために使う時間を増やそう

学生話を聴く、食事をする、共に教えを学ぶ、ひのきしんに汗を流す、会えない学生に手紙を書くなど、学生のためにしっかりと時間を使う。

一、教祖年祭の意義を伝えよう

全教が一手一つに年祭活動に取り組む中、まずは学生たちに教祖年祭の意義を伝えられるよう努める。また、先に道を歩む大人たちが勇んで年祭活動に取り組み、その姿を通して身近な学生に信仰を写していく。

いつも私が言うのは入信です。入信すること、言葉は少しおかしいかもしれませんが親からにをいを掛けられて入信すること。信仰の初代の場合、みんな入信した時を持っていくわけです。ですから、あなたの信仰の元日、きっかけは何ですかと聞いたなら、スラスラと答えられるのが初代の人です。

ところが我々は、割とスラスラとは答えられない。あなたの信仰のきっかけは、あなたの入信の時はいつですかと聞かれても答えられない。答えられないから「生まれた時から信仰しています」という話になります。生まれた時から信仰している人はいないでしょう。どこかで、成長の段階で親のまねをしながら、話を聞かされながら信仰のきっかけというものは得ていくけれども、入信ということをしたかどうか、これによって自分の信仰に責任を持って自分で思案することができるようになる。これをしていないとお道の信仰は成り立ちません。信仰の元一日が大事だとよく言いますが、そういうことだと思います。自分で自分のことを思案できるといふこと、それができないとふしから芽を出すこともできないし、いんねんを切り替えていくということもできない。身上・事情からご守護を頂くことも思案の筋道がなっていないかということになってしまいます。そういうこともぜひ意識する旬ではないかと思えます。

具体的な年祭活動となってくると、学生たちにとってはこ

れも高校生と大学生では年代的にも違うと思います。あまり無茶なことを言うこともないとは思いますが、基本的なことから教えていただきたいと思っています。

教祖の年祭活動を進めるうえで大事なことは何かというと、やはり教祖のことです。教祖がご存命であるということ、これはどういうことなのか。また、ご存命の教祖と自分が向き合えるかということだったり、あるいはひながたとは何なのか、ひながたを辿るとは何なのかということだったり、若い人、信仰の浅い人はひながたというと、ご苦労であるとかしんどいことが頭に残り、暗いと言われます。暗いことではないのです。しかし、暗いイメージを持たれている。これをちゃんとしてあげなければならぬと思います。

ひながたということ、また、教祖の年祭という旬ですから、年祭の元一日、つまり明治二十年の出来事、そこに込められた教祖の親心、それは年祭だけではなく毎年の大祭の理と同じことです。そのところもちゃんと教えてあげる。わからないところは聞いてあげる。これをお願いしたいと思います。そして、それがあってこそその年祭活動となってくるわけです。ただ、理屈ばかりを言っても分かりません。一緒にひのきしんをしようとか、おつとめの練習をするなど、いろんなことをどんどんしていってほしいと思います。

特に私も皆さんもそうだと思いますが、若い時、年上の人が使う教語が分からなかった。日本語なのか教語なのかよく

分らない。例えば「自由自在」、「思召」と言われて意味が分かったでしょうか。深い意味ではなく、言葉の意味すら聞いたことのない言葉が出てきて、それを頻繁に使うので全然分らない。外国語を聞いているような意味の分からない状態に彼らはいるわけです。ですから私たちがそこに戻らないといけない。みんなが経験してきたことから、そこに戻る。彼らの分からないことは、自分も経験した分からなかったことだと思えます。また、分からないことだけではなく、疑問であったり不足であったり、そういったことも種類は変わってきているかもしれないですが、だいたいは皆さんが持ってきた不足を彼らも同じように持っています。その疑問、不足を聞いてあげるといふこと。それを説き聞かす側だけになってしまうと、聞くほうも聞けなくなってしまう。この中にも年配の方、若い方がおられますので、しっかりと力を合わせて対応していただきたいと思っています。何が分からないかが分からないと物の言いようがありません。そのあたりもぜひ改めてお願いいたします。

現在、年祭活動三年千日のスタートの時です。三年千日ですから3年間頑張るということですが、自分の3年後のことは分かりません。年齢を重ねると生きているのかもわからないという事になってきますので、今はまずスタートの時であると思得ていただきたいと思います。そして学生たちには次の年祭もあります。今20歳の方は教祖百五十年祭の時には30歳です。その次の百六十年祭の時には40歳。そう考えていただけるとい

り、本当の意味での丹精になっていくのではないかと思います。そして三つ目は、「教祖年祭の意義を伝えよう」であります。

現在は諭達本部巡教が進められ、いよいよ全教が一つ一つに年祭活動に取り組む旬がやってまいりました。

真柱様は今年の年頭ご挨拶で、「教祖の年祭を勤める意味を徹底させることは、本当に難しいことだとあらためて思います。やはり、伝える側の責任は大きいと思うのであります」とお話くださいました。また、「伝える側の姿勢としては、信仰姿勢、普段から教祖の教えられたことを身に行い、なるほどの人になる努力をすることを怠つてはならないと思います。その人の信仰から伝わるということはやはりあると思うのであります」とお話くださいました。

現在のお道では、普段教祖のお話に触れる機会があまり多くないように感じますので、教祖がだんだんと遠い存在になつてきてしまっているように感じます。しかしながら、このお道の信仰は、教祖のみ教えやひながたがなければ成立はしませんし、教祖に対する思慕の念とご恩報じの念こそが信仰の原動力となるはずだと考えます。言うまでもなく教祖は、ただの歴史上の人物ではなく、今もご存命で元のやしきにお留まりくださり、お働きくださっている真実の親なるご存在であります。

と思います。私はもう次はありません。今が60歳で次の年祭は70歳です。おそらくいるでしょうけれども、私が教会で次の年祭の中心になつていようでは駄目なんです。私には中心になつていく人たちの後ろでしっかりとさせていただく役があります。そんな私の年代とは違うのですから、今全力を求めるといふ意味が私たちとは全然違います。そういったこともよく考えていただいた上での一つ一つということをしていきたいと思います。また、求めていただきたい。その役割を学生担当者の皆さんにお願いしたいと思っています。三年千日というまさに成人の旬、たすけの旬といふこの時にそういった結果のご守護が現れてくるよう、また現れてくる発端のことであってもお見せいただけることがあればありがたいことだと思います。長い々々活動ではありませんけれども、この3年は大事だと思います。どうぞその気持ちも併せてお持ちいただいて、それぞれ今のお立場を全うしていただきたいと思っています。

これからも勇んでおつとめいただきたいとお願いいたします。挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

(文責 清水慶政)

そもそも、教祖は私たちのために何をしてくださった方なのか。何のためにご苦労くださったのか。教祖がご存命でお働きくださるとは、一体どういうことなのか。そういう教祖のご恩と親心について伝えさせてもらうことが、年祭の意義を伝えることにつながっていくのではないかと思います。

まずは学生たちに教祖年祭の意義を伝えられるよう共に伝える努力をさせていただきます。また、先にこの道を歩む私たち大人が、教祖の年祭を成人の節目として、仕切つて年祭活動に取り組み、陽気ぐらいへ向かつて成人する自らの姿を通して、身近な学生たちに信仰を写していけるよう共に努めさせていただきます。

以上、このような活動方針の下、教祖のひながたを道しるべに、お道の人らしい明るい心で育成のご用を勤めさせていただきます。

皆さま方にはそれぞれにお忙しい立場かと存じますが、もう一つの年祭活動だと心を定めて育成のご用に当たらせていただきたいと思います。そのことをお願い申し上げます。挨拶とさせていただきます。本日はありがとうございました。



合いながら、学生と共に一歩ずつ歩んでまいりたいと思います。そんな決意を込めて、この基本方針を考えさせていただきました。

その上で、私たち育成に携わる者が、来年一年間、特に心掛けていきたい実践項目として三つ挙げさせていただいております。

一つ目が「教祖のひながたを学び深め、学生に伝えよう」です。

教祖百四十年祭に向かう年祭活動のこの旬に、まずは育成に携わる私たちが、『稿本天理教教祖伝』や、『稿本天理教祖伝逸話篇』などを通して、教祖のひながたを学び、教えを実践する中に理解を深めていく努力をさせていただきたいと思っています。

例えば、各学担の委員会などで、委員が持ち回りで逸話篇の発表をしたり、教祖伝の勉強をしたりして、教祖のひながたや教えを学び、少しでも日常生活に落とし込んで実践して、自らが学び得た実感とともに、ご存命の教祖のご存在とお働き、そして、陽気ぐらしのひながたについて学生たちへ伝える機会を増やしてまいりたいと思います。その教材として Haplist など活用していただけるようにしたいと考えております。

二つ目は、「学生のために使う時間を増やそう」です。日常の丹精については、前期委員会でも繰り返し呼びかけ

をさせていただいてまいりました。学生の育成においては日常的な丹精が欠かせません。学生の話聴く、一緒に食事をする、共に教えを学ぶ、ひのきしんに汗を流す、会えない学生に手紙を書くなど、いずれにしても学生のために時間を割くこととなりますが、そこでしっかりと時間を取って、腰を据えてじっくりと向き合うことが丹精にとって重要なことのように思います。

しかし、人のために自分の時間を割くということは簡単そうに思えますが実は難しいことだと感じています。だからこそ、その尽くした真心は相手に伝わりやすいと思いますし、何よりも人のたすかりのために差し出した時間や真心というもの、親神様、教祖が誠実としてお受け取りくださるに違いはないと思います。

学担の先生方には、これまでも学生のために時間や労力を尽くしてきていただいたと存じます。しかし、その時間をこれまで以上に意識的に増やしてまいりたいというのが、この実践項目であります。しかしながら、本当に簡単なことではありません。この子のために自分の時間を使うんだ、という決心が無ければ、日々の忙しさに流されて、また今度また今度と言って、なかなか学生に向き合うことはできないだろうと思います。ですから、まずは心に定めることが必要かもしれません。これが自分にとっての年祭活動であり、ご恩報じなのだと心を定めて通るからこそ、相手にもその真心が伝わ

立教百八十五年 学生担当者大会における

清水委員長挨拶 十一月二十五日・第二食堂

本日はお忙しい中、学生担当者大会にご参集くださり誠にありがとうございます。只今は表統領先生より、とても具体的に現実即したお話を頂戴いたしました。ぜひ私たちは世代や立場を超えた、縦の一手一つを意識して学生層の育成に努めてまいりたいと思います。

さて、私からは新たな活動方針を発表させていただきます。基本方針、「教祖を慕い、ひながたを辿る喜びを共に味わおう」。

このお道は、教祖お一人から始まった道であり、教祖の子供可愛い親心とご苦心によっておつけいただいた道である。そして、『諭達第四号』で「教祖はひながたの道を、まず貧に落ちきるところから始められ、どのような困難な道中も、親神様のお心のままに、心明るくお通り下された」とお示しいただくように、教祖はどんな中も常に明るく喜んで、たすけ一条の心でお通りになられた。学生や私たちは、日々の暮らしの中で悩んだり、迷ったりする日もあるが、この教祖の陽気ぐらしのひながたがあるからこそ、未来に希望を抱き、明るく前を向いて、ふしを乗り越えていけるのである。教祖百四十年祭に向かうこの旬に、まずは先に道を歩む私たちが、教祖を慕い、教えをしつかりと心に治めて、この信仰の有難

さとひながたを辿る喜びを学生たちに伝えていきたい。そして、教祖の年祭を成人の節目として、教祖のひながたを道しるべに、陽気ぐらしへ向かうこの道を学生と共に歩んでいきたい。

このような内容にさせていただきました。

私が学生層育成者講習会の場合などで、いつもお話させていただいていることなのですが、私自身の実感として、10代や20代の若者にお道の信仰を伝えていくということは、実は非常に難しいことだと感じております。なぜならば、若者自身が、自分が信仰をする必要性というか必然性を感じていないと思うからです。

たとえば、にをいかけやおたすけの場面でも、自分から信仰を求めている人やたすけを求めている人にお道の教えや信仰を伝えることは、それほど難しいことではないかもしれませんが、しかし、信仰を求めている人にお道の教えや信仰を伝えるというのは、なかなか一筋縄ではないと思います。お道の若者の多くも、ちょうど似たような状況にあると思うのです。

その上、世間一般でも、若者の宗教離れ、信仰離れが顕著になってきているという調査結果もあるようですから、お道の若い人たちの中でも、何となく隙さえあれば教会や信仰から離れよう、距離を置こうとする若者が増えてきてしまっているように感じます。

写してまいりたいと思います。

基本方針の説明文に書かせていただきましたが、皆さんもよくご承知の通り、このお道は、教祖お一人からお始めいただいた道であり、教祖の子供可愛い親心とご苦心によっておつけいただいた道であります。

ある時、一人のご婦人さんとお話をしていると、そのご婦人さんが「大教会長さん。私ね、あんまりひながた通れ、ひながた通れと言われると、何か気持ちが悪くなくなってきたやうですよ。こんなんじゃない駄目だっと思うんですけど、どうしてもそう思っちゃうんです」と言われたことがあります。

私が驚いて、「えっ、どういうことですか？」と尋ねますと、その方は、「だって、教祖のひながたって、貧のどん底だったし、子供に先立たれたり、笑われそしられたり、牢屋に入れられたり、辛い事ばかりですよ？ そりゃ、教祖は世界一れつをたすけるために勇んでお通りくださったんだとは思いますが、私にはそんな人生、よう真似せんなっと思うんです」と答えてくれました。実に正直な感想だと思っています。

その答えを聞いて、ようやく「なるほど。そういうことか」と得心がきました。確かに、そのご婦人さんが言うように、教祖の五十年に亘るひながたのご道中は、一見すれば御苦労に次ぐ御苦労の連続で、大変な難渋な道すがらであったと思

そのような状況の中で10代や20代の若者たちに、このお道の信仰のありがたさや喜びを伝え、信仰を受け継いでいってもらうためにはどうすればいいのか。そこが今、本教の最大の課題となっている部分だと感じます。

そこで大切にしていきたいと思うことは、先に道を歩む者の信仰信念です。私は、信仰というものは、身近な誰かの信念によって導かれる部分が少なくないと感じています。特に、先に道を歩む私たちの普段の言動が、若者たちに希望を与えたり、あるいは、失望を与えたりしてしまっているように感じます。

私はよく、教会の青年さんや若い人たちに、身近で誰か尊敬できる大人や先輩がいるかと尋ねてみるのですが、その時、理由を聞いてみますと、結構な割合で、「あの先生が、誰かのことを悪く言っているのを聞いたことがあります」とか「いつも、自分から率先してひのきしんをされていて、すごいと思います」とか「いつもニコニコしていて癒されます」というような答えが返ってきます。

私は、少し意外に感じたのですが、若者は意外とそういうところを見ているのだと思います。若者の心を動かす信念と言っても、何も大層なことばかりではなくて、日々の生活の中の何気ない言動が若者たちの心に写っていくんだなと思います。ですから、私たち道の大人は、できるだけ日頃から若者の手本になるような信念ある言動を心掛けて、その信念を

います。しかし、全ては目の前で難儀する子供たちのたすかりのために、親心からしてくださったことばかりなのです。きっとそのお心は、いつも明るく澄み切ったたすけ心で満たされていたのではないかと、そのように思います。その証拠に、教祖が落ち込まれたとか、不足を言われたとか、恨み言を言われたなんてことは聞いたことがありません。

そんな教祖のご存在は、当時の人々にとって「明るい希望」そのものだったのではないのでしょうか。そして、今を生きる私たちにとつても、この道の教えと教祖のご存在、そして、それを信じて、ひたむきに歩む真の信仰者の姿は、きっとこの世の希望となるに違いないと思います。

私たちや学生は、日々の暮らしの中で悩んだり、迷ったり、心を曇らせたりする日もあります。でも、この教祖の陽気ぐらしのひながたがあるからこそ、未来に希望を抱き、明るく前を向いて、ふしを乗り越えていけるのだと思います。

今、若者は未来に漠然とした不安を感じています。そんな先の見えない世の中だからこそ、未来に明るい希望が必要なのだと感じます。そこで、教祖百四十年祭に向かうこの旬に、まずは先にこの道を歩む私たちが、教祖を慕い、教えをしつかりと心に治めて、信仰のありがたさとひながたを辿る喜びを自ら感じ、味わって、それを自らの実感を込めて学生たちに伝えてまいりたいと思います。

そして、陽気ぐらしへ向かうこの道を、励まし合い、高め